中村俊定文庫
文庫 18
454

京都帝国大学図書

むかしより代々の祖師方の教法は去来ともに示
給へる獲麟の秘決也 向宗のみ専
正覚偏諸を連続して出生せるが如
くなれば欲はなくして命のながらへ
ばかりを待なり弥陀一仏を頼
中ばかりをたのみ奉て他力弥陀
一味の光明あるものをたのみまゐらせ

俊宣藏

亦の傳授は人〻いかるべきこと
なれども知る人〻稀なり横太郎
なりけるを嗚呼惜むべき事なり
若月薄雪の時なる血さけ乃
思ひを結ぶ美人の数多人ぬ物
なりける和水二人の者を次て作る
文源氏しく賜ふ追悼の

白を知ひ浮世の一章を紀記
して今日迄在〻〻小篇の記
出来ぬ是よりあるを
知る一冊の名を二のハ法ハ法也
よりなり法〻筆を深て世事を
おもへて高ふ明るく明るちうひくて
まつりしあるを西の首途姿も

眼のあたりさし初てしたのみを毎
阿弥陀仏等てはよりまろひ出る一向
一念仏ばかりをとなへまさく、世事雑念を去
たゝのいふ

明和七庚寅歳

辞世

太喬

和水

蔡太

子交

雪成

慈求

ウ

冬ゝ人ぬ松の尾赤いむあ丸文　吐月
紫袋めつらしう丈はつきゝ　太
仙人よ脚くたこの名へと汁　水
雑巻をはゝいつゝ書れ山陰　成
いつゝも年寄りて時雨　文
さゝをいくさうせぬしもふ　月
それうよ嘶ふ聚篇ゑ人　求
鞠さへ石ゑ衣投ふ新く　水

夕風のそよくそのまはりの　太
こゝろを風ひひ乃月の三日汐　文
厨ゝ花ふむ亭れうひ重　求
氣のそゝふて出ゝぬなり　成
ナ
傾城のまゝ九つゝ青ふこゝろ　水
うつり者紅ゝ尺せるうせそ　太
和ゑちる人を神閉の山形ろし　月
餅ゝふくれ梅ゝ三方　求

はなのいろ烏帽子姿さしくと　交
京ゑりそろつく楢も稼の井も　月
いけ觀も裏表ゑりうとき簾　成
ぼんさぼくぼんさんぼんの一行　水
簡素まる稽古仕合ゑ出でる　月
徒改ふ色の果敢まくくも　成
身とくれ見ぬ家とこな紫　太
ゑ年の海くゑ唐うかくいく　交

ウ

繪つふ歪せんくくの敷まし　求
教是ちうきはゆ玉見軽　太
てくくとおゆ色の横日新　成
風れちゆ孫も口條二糸　交
弥陀彩む紗紫の地色を　月
雲あれて地もむくさ紀の草　水

名ふ出略

其一

さ人を吟ずぬ帆たすきを尾　蓼太

皮を呼ぶの声も夏やま　和水

麦ふるれ三人ずつ笑ひあく　吐月

其二

麦ふるも神ふるうたを蓼乃秋　吐月

絵もむ絵も光のうらひす　蓼太

菜のうら動使の仕乃花のやうて　亀求

其三

嗚呼この日麦ふるも悲し妹の風　雷堂

新よ声うたをみうり翡翠　曹成

文意北二見ヶ浦よ赤石して　春亀

其四

おいしのよ仏生を本なるうら　六窓

赤を毒けき花つゝの袖　禾道

車ゝ冥かふれなたまうく　阿人

其五

人ちらぬ山れおくやかんこ哉　連文

遠よりけしいとゝ哉　子文

遍照の那附の麦飯をうけけて　和水

其六

わゝ菜や菜屋の日をまちもせん　眠我

あふ知のうれの若れ夕迄　五十竹

れ言よ寸入れこも耳うれ哉　吐江

其七

光盤布を見ひしく人もちるの日うら　桃境

と那りハ麦をうれこむる扇　春色

うき雲れ面ふりこはを敷蓉哉　禾道

其八

時ぬ日も時日をうの敷し　郭公　八十男

夜ちもうるの行うれの面　桃境

虎れお丈ちる餞を猫よとりて　子文

其九

又ともの月てり入りてさえ　吐江

芳菊ちる菊よりさらふ人新　蓼古

鉢のこゆ七堂伽藍くもあけく　普成

其十

卯月とは初の夏の風　夢古

菜ちり数ちるも花乃皮　八十男

いつ拔く菜ともえん鶯てふく　五十仙

其十一

芭蕉樹の芳菊を月乃竜ち邨　普成

死也ち田也も南岳西元元　岳求

赤帆片帆おのうさ海く吹入事　連丈

其十二

明のこる月もたかくみち蜀魂　子文

鬼仙くむ桶ち新も深菊　阿人

ちらちらと楷の火新も手ふりて　桃鏡

其十三

根ちかくる卯月の照り桜人　魚水

雪も吉入るほのき夏山　祖山

去ぬる春を机をあるむらせ　雷堂

其十四

施たもと卯の花くたせ雨の郭　祖山

扇ちり乃ふ笠の行　眠我

るなるよ駅路の錦ときまさく　子規

其十五

ちる花に秋ちと相ふおそろふ処　夜槽

萩もうき咲みひろけれ　文来

陽山を家こうこと住ふ思く　山幸

其十六

筆や今吉野を友むとり　山幸

このつはもとる秋の庵丁　夜槽

井戸掘に接も蓮る新風子　文来

其十七

おもうけぬ見てする桐の葉茶哉　文来

清浅

清水の清水するを白雨　山幸

人をもき隅田を遠うゝ夕越雨　夜桔

其十八

埋もれ井清し　茂るの玉　阿人

漢　花

爰ちりくてり　懸乃有明　連丈

安産のたゝせる松のもとを引く　眠我

其十九

白菊や寝ぬる蔦うる風乃前　五十行

きそをよ松ぬ友の妹香　六窓

旅ちゝ生ちの絵をて面　蓼古

其二十

卯月茶よ尾ハ行ゝ　死おの旅　春鬼

清水ちけうふ月の西方行　吐江

茶うゝくきる連歌も仕茶一ゝ　八十男

其二十一

たゝへとも文よりの外の花月秋の郭　示道

おとゝきて花の雪も亡跡　雷堂

ゆゝ賽法拔てるるの声の明て　六窓

其二十二

あうなや命を無常ときく　和水

ちき人新を懸のまゆゝし　吐月

手門を常盤に波乃花咲て　夢太

追悼 各自号略

蓮のゆる泥一と絲に切帆ふ　松風子

今更てむすゝりて苦清水　百貢

美人の世日八ふしちり牡丹　奥汝

京蜂の袖もとゝまぬ袷ふ　風者

石よりのちき名を埋次吉の花　葉宗

袖垣よ玉すく菊も涙この郭　俳賀

ちさ人の云葉絶て蔵り月　虚舟

奇妙や菱とてうり初かな　尚丹

、

薄の干深へたるむいのちから　上総　也物

五月や雪も雨へとほときん　月嵐

道の葉やきまゝあをを向ひ　吐虹

けしの花ちる世を法のおしへかな　如流

今文は時もを向や蝉乃声　八竜

卯の花や葉をすくよを向き　桂笑

卯の花や雪毎を汲てを向ふ　慶樹

ちつしむを面影や形ほ原　冨吟

山ゝやの涼しきまゝ形うら　更長

、

を人よりを牡丹を蓮の肌　人左

撫をを仏つくるむ白牡丹　珪山

速　手撫へあり誕生会

七人ひとゝひ編集の思ひ立

ありて、社中の老たるより和
己の玉声を元もとむるまいまく
き事不敏しきくるり刊
仕れを志を次くいさの句菓と
あつむる而を謂て句象とる　ぬ

新霧の京なつかしやさく粽　天府子
あつきを嬢人追て敷老の風　婆心子
樹末風のちらぬ霧あり菓の花　枕風子
行秋や石ちる樹の風寒き　求光

市中や蓮て秋ちる屋乃声　乳峯
海れとの鐘ちいるれすを毋　芳堂
今新ぬれを十すもあるぬ御うの　鬼守
きつる紀月ようれて園扇哉　花明
きき海き嬢住うり小松砧　是物
紅月や紀よんるほとき民　如風
ちりる柳よ僧れ色仏の那　祇什
秋を屋よあるを此之冬牡丹　祇之

たのうつきの夜の月影やきりぐす　菜路
雲よ入り　多のうへ　やゝ紙　北矣
海棠や月よハ動く秋もすゝ　完車
ぬゝちゆめゝられ川風の焼籠哉　新釣
魂抜やとゝあつめても茶乃家　旧国
さゝやいくふゝ連ゝ川胡蝶哉　花口
ゝゝき牛きのふすゝり一角ユ　愁赤
蛍や　砧の石をむゝ　ゝゝ　對笑

洛陽を京ゝひろけて花火哉　涼風
霧よさゝへさむしゝゝせく附面哉　反孝
ちゝぬはのいとゝ抱うき柳ゝ肌　鬼秀
むゝ面や屋をてゝ仏ゝ虫の声　必観
洗れちくるゝ見えぬ松すり萩の花　斉南
出ぬいぬのそむけくゝゝの秋の蓄　其童
拾ゝ芝一扇をゝ白一ふの月　夜光
飛ほゝ八時ぬ多ゝりかゝてきた　莫也

引き寄せや吉水院北仏前　普成
あの猫も恋しく思ふや僧侶師　子交
雪ばうくひそ咲くや初春の風　愛求
蝶雪ふ舞の羽風やくる度る　木然
雪や迎歩して見る紀伊の国　寿蝶
くれぬまの夜の星生や後乃月　爲秋
歩もすうう魂もこすれ水の音　長扶
弱雪や付斗よ起きまくら元　活丈

かくうきやゆきひの君を時雪　蘭江
回うへ笠見せく金りいさり松　菊路
竜の手をすぬけ多り松り蛇　苑涼
音ふきを花のまうう鶯さう　野賀
涼しさや葉吹うけて門乃庵　曹紫
さむしはを人よこそ竹婦人　子交
碑さめ二うひ文ときを　愛求
森の竹の時ぬよいつこ椋雪の声　爲曉

五月雨や深うともうる渡乃城　寛丈
沼――こく赤ルまくらき牧を見る　英岳
雷れ竹押ふけて新月の
稲刈こちらあけ之炊の煙　湖堂
蕈のもはむ側うつるとり　仙路
松虫や白粉の花日之のを新　阪白
きさきうき月の切絵や白川　巨鶴
つくりぬをふ代のため一の世菊哉　接龍
　　翌九

はきく〜の果ともうる足れ枝瓢　普成
花ようも芭蕉よ無一風乃音　子文
名月やさうつきもろふれ溝ふ　魚求
牧を火やうそつく音のうしろ金　一警
ふもとうは麦ほく音や雲の巣　湖山
衣うりときしくやきをくを　龍坡
光木も紙子の音や枯柏　神奥
声も又花咲ものれ初ときす　杉夫

うゑひたる耳なりいせて郭公　蘆風

山秋や関のうしろの菜大根　雪丸

青苔うゝ月を文ゝり清拙迄　李朔

蕉帆の青さつゝたり浦の月　獨化

此星は襟よ蕉ゝり意象仏　蒼宋

青苔の仏起し一茶ゝ念仏　子交

日よ意文蕉の乞ゝや帰嶺　魚求

夕潮のおかこ花ゝり橋すゝ　班象

、

苗代のたきゝりよりこく蛙ゝ哉　吏仙

雲の峯ゝつゝて白ゝゝゝゝ秋　眠江

三絃は月を動金や赤ゝのゝ　吐象

陽炎を三十三所発ゝゝ　耳得

入ゝて蓮人ゝゝて蓮の月　蓼丑

菜大根地ゝ素ゝゝぬ九月尾　蓼丸

四十ゝのちは友ゝゝ月ゝゝ　金魚

一葉てをとる芭蕉のやふなり　瓦子

蜆舟や牛とまんとす此ほとり　巴水

いりあひを爲て史て古郷掛　巴蕉

下る時一羽よりそ玄花うち　玉峯

京花や胡蝶の老て眠る時

、

ちまき菓子花たをも喰ふ是　加賀　閑史

白麦や茶をとり用ひて茶のうへ　京　蝶羽

茂中ねの古墳にて

塚さへよそふ一の日を忘やさて　名古屋　曉雲

村塚の夜もひとつ懽う郎　吳服　蝶羽

、

道よ死そのうつくしき胡蝶哉　山章

志賀寺やたゝまことをとを子紀　阿人

君うて啊て清水のする秋哉　文来

名月や生れてもつゝ八峯の松　葵太

笑とりて浮世語らむ山桜　人龍

嵐ふれて日も蔵よきや女郎花　周竹

地をそゝる菊ハ何〳〵夕すゝ　雷堂

人よりも高き松の月　鼓古

ちいさきも又強のちり初茄子　吐月

何ひとの出てこゝろの紙帖風　橋蔭

投うりとゝ大くゝ見る相撲うち　速丈

月星よ見張らせてやひとり出　女地菊

銀鳥ゐ行付意し後乃月　青面

涼しさや帆の按く切淡路島　乙兒

十七ページ